

夢生

色鮮やかなものが溢れ

冷たく輝く

眠りは空白となり

飛び越えられる

狂気とはどこから湧き出るか

それを知る者はない

二重写しとなった日常

その中からかろうじて目を凝らす

必要であるか不要であるかを

分別することは、そもそも無意味だ

ただ、何物かを糊塗できるか

それのみが求められている

失われた言語は

ゲル状の物体となっている

風化した自負なるものは

既に干からびた虚栄となった

二重写しとなった日常の中心では

焦点は無限の彼方でしか結ばれない

認識でさえもが

単なる視覚的図形でしかない

新たな生命体が増殖している
そうとしか呼べぬ挙動を示しながら——

酸素欠乏した部屋の中で
じわじわと吐き気を覚えはじめるが如く

あるいは自転しつつ周回する衛星に乗り
上下左右を失うようにして

そのようにして
私は生き続けている

(2011.2.11)